

そうでなくとも彼女の声は小さく、私の耳はボソコツだったので、終始マスクをつける暮らしとなって私は大変困っている。彼女の声にはほとんどマスクに吸いこまれてしまっただけで聞こえない。こういう事態になって気づいたのだけれど、モスキートな声の断片と、表情や口元の動きの観察結果をつなげ、脳内予測変換機能を駆使して、彼女と会話していたらしい。目は口ほどにものを言うというけれど、顔の半分もマスクに隠れると、想像では捕いきれない。



かくらこう

マスクに 吸いこまれる 彼女の声

どこまでもつづく横断歩道の話

「本当はドクダミを抜こうと思ったんだ。白い花が咲くと、蟻を蜂蜜のビンに閉じこめたのを思い出すから、胸がぎざぎざする。月食の日だよ。コンビニもチカチカ点滅して、振り返ったら発光して暗くなった。消滅したんだね。道が暗くてね、点字ブロックだけ光ってた。風もなく、水槽の底を歩くみたいだった。そのうち、横断歩道が見えて。ずっとまっすぐ、ずうっと遠くまで、白線が浮かんでね。孔雀が立ってた。川が流れもしないでぬったりと淀んでるの。歩いてても歩いてても横断歩道が続いて、どこかでサイレンが鳴り始めて、溶けた月が落ちかかって、読経もラップされちゃって、私の肩くらいある蟻が駐車場の自動販売機を壊して、それでどうしても食べたくなくて久々に買った」

静かに、しかし喜びを隠しきれないといった調子で彼女が語り、皿へ移したのは、町で有名な洋菓子店の、白いクリームをサンドした大きな分厚いリーフパイだった。

「……ドクダミは？」

おそるおそる私が質問すると、彼女は下脛をぴくつかせて首を傾げ、皿を持って壁を向き、マスクを外してサクサクとリーフパイを食べ始めた。

私もマスクを外しアルコールシートで手を拭いて、狐のお金みたいなパイにかじりついた。

踊るべき信号機の話

「公園前の信号機がさ、踊れに変わったものだから鳩も踊りながら渡るんだよ。私は米が重くて根をあげちゃった」
深刻そうに眉根を寄せて、犬の糞をビニール袋へ片づけながら彼女は話した。
私は周囲を見渡した。信号機の緑色が、ただの〈歩く人〉であることを確認したかった。遠くの信号機が赤だった。その下に待機する人物が踊っているのか歩いているのか。

いつまで休んでるつもり？ と芝犬がリードを引いてきた。すでに始末を終えた彼女が前方へ進んでいて、急ぎ芝犬と共に追いかけた。

歩道橋にのぼった話

彼女は歩道橋に目がない。道路を渡る用事がなくとも、歩道橋があれば必ず階段をのぼる。展望台なのだ。道へ飛びこむのではないかとヒヤヒヤするくらいに身を乗り出し、上機嫌でここそと喋る。

「湖に映った月が実は大きな蛍だったからね」

「六道の境界でシスターが溶岩を焼いたの」

「おじさん、ハレー彗星に乗って行ってしまったからずっと留守なんだ。イトコが海賊」

同じ高さから下界を眺めている。脳内変換される彼女の話に触れていると、道路が光の泳ぐ川に見えてくる。世界をただそうとして、聞き返すと、彼女は得体の知れないものに出会ったような目つきになった。やはり私の脳の回路が混線しているのだろう。

「耳に死んだ猫の毛が詰まったままなんだね。早く慈悲科に行っ診てもらおうといいよ」

彼女は真剣に心配してくれる。腕のいい慈悲科を探そうと思う。

<https://www.kakura-ohanasicafe.com/>

Twitter@ohanasicafe

©2021 Kakurakou

発行 おはなしの喫茶室

作 かくらこう

令和3年6月18日発行

第6回パーパーウエル参加作品「散歩」

